

独居・虚弱高齢者への配食サービスを強化

WAM(独立行政法人医療・福祉機構)の助成金が内定

独立行政法人医療・福祉機構(WAM)が募集していた「長寿・子育て・障害者基金事業」に昨年10月応募していたが、約半年間の審査を経て3月末、内定通知があった。事業内容は「食を通した福祉コミュニティーづくり」で、次の2本の柱からなる。



独居・高齢の男性料理教室も

①「食の自立支援」をめざした男性料理教室

独居男性高齢者が自分の食事づくりをはじめ食生活が管理できるように「食の自立支援」をめざした男性料理教室を開発する

②独居・虚弱高齢者への配食サービス強化

明舞ひまわりの配食サービスは40食から1.5倍の60食をめざしているが、ニーズは日々ふくらみ、すでに目標に到達しててんやわんやの毎日である。加えて4月はじめ相次いで入院していた利用者の方々のうち、連休後4名の方が退院され、「刻み食」や「軟食」なども入って複雑な配食メニューを展開している。入院後間もなく亡くなられた方もある中で、無事退院された方々には、おめでとうと拍手したい。

「ひまわり」のお弁当で元気になってください。

助成金事業はこうした事業を強化したり、新たな展開をするために活用していきたい。そのためにも、ひまわりには今後も“マンパワー”が必要であり、今秋には5年目に入るための人材開発とNPOとしてのパワーアップが重要になっている。(写真上=配食弁当の詰め合わせは総がかり。下=「はい、夕食ですよ」配食を届けるスタッフ)



昨年度の「垂水魅力アップ事業」終わる

食のフェスタ&クリスマスコンサート、幼稚園への食育出前講座、男性料理教室など多彩な活動を通じて、多世代と「食」からのアプローチによって交流した2006年度の垂水魅力アップ事業が3月で無事終了した。4月30日、垂水区役所で開かれた報告会で、入江代表が明舞ひまわりの活動を報告した。2年連続でおこなったこの事業で、明舞ひまわりは多忙をきわめたが、地域の多世代の人たちとの新しい結びつきがはじまり、ひまわりもいよいよ明舞に根をおろした感じがする。

うれしい悲鳴 ボランティアの申し出、続々

2月に神戸新聞の明石版と神戸版に連続して「助け合いの輪をひろげよう」とひまわりの活動が紹介されて、終日電話が鳴りっぱなしという嬉しい悲鳴をあげた。カーボランティア2名、調理ボランティア3名増となり、数の面でボランティアの慢性的欠乏状況を何とか切り抜けることができた。いまさらのようにメディアの力に感服。1日平均10名のボランティアがああ狭い厨房でひしめきながら、活気のある状況が展開されている。

「食育出前講座」 神陵台幼稚園で開催

かねてから多世代交流を考えていた「明舞ひまわり」は、小山理事の骨折りで神陵台幼稚園のご協力によって、園児とお母さんを対象にした食育講座の開催が3月10日の土曜日、幼稚園の遊戯室で実現した。(写真)

手洗いの水だけしかないという教室のため、テーブルコンロをはじめ調理器具一切を持ち込み、園児20名とお母さん18名が朝早くから「米粉をこねて何ができるかな？」というタイトルの食育講座に集まった。兵庫大学Vnetの学生5名の参加もあり、かわいい紅葉のような手で春キャベツを切る園児の安全についても心くばりができ、「キャベツ焼きと米粉だんご入りフルーツポンチ」は無事できあがった。

「こんなにキャベツが食べられるなんて」とおいしそうにたいらげる園児を眺めて、お母さんたちも嬉しそうだった。試食後にはお母さんたちからの質問もあり、充実した春の1日だった。大石講師をはじめボランティアのみなさん、ご苦労さま。

ひまわりで研修終え一般企業へ就職内定

コスモス共同作業所の障害者が巣立つ

兵庫県の障害者インターシップ事業の一環として、明石市内のコスモス共同作業所から研修にきていたO(オー)さん(41)がひまわりでの2ヶ月間の研修を無事終え、このほど一般企業への就職が内定した。

Oさんはきちんと仕事ができる人で、お弁当の配達準備、来店したお客様へのお茶のサービス、厨房での調理作業を週4日、9時から4時半までこなしていた。ボランティアたちからは「Oちゃん」と呼ばれ、だれからも好かれていた。彼女がひまわりから去ることは寂しいが、彼女の将来のために祝福したい。就職先は、食事づくりに関連した業種と聞いている。ひまわりで身につけた力が今後役に立つことをみんなで祈ろう。

利用者から ミニ通信のメニューにわくわく

先週、デイサービスからお花見に連れていってもらいました。松が丘公園、東谷公園の見事な桜、すばらしいですね。さて、今日は「ひまわりミニ通信」30号に今週の献立表が載っていました。ワクワクしながら拝見。思わず「やった！」とひとりぼっちの部屋で子どものように万歳をしてしまいました。4月12日は私の大好きな「露(ヲ)ずし」だったからです。楽しみにしております。感謝。(西舞子 A・Sさん)



ボランティアの声

核家族の暮らしにヒント

ひまわりの活動はいろいろな種もっている。私にとってはバラエティに富んだひまわりの献立が、わが家のワンパターンの副食に変化を与えるヒントになっている。また、あまり使うことなかった小芋やレンコンなどの食材を使ってみようという気持ちにもなった。核家族のわが家では、世代を超えて伝わっていく伝統的な料理がほとんどない。自信をもって伝えられる料理がないというのも、寂しいものだ。子どもは料理教室や外食の影響を受けて自分の好みに合ったものしか作らないようになるだろう。せつかくある四季折々の食材をありがたくいただくということは大事なことだ。

また、20代、30代から60代、70代と世代の異なる人と一緒に活動する場はなかなかない。お弁当を届ける先の80代、90代の方々の人生を思う時、心に残るものがある。ひまわりの活動時間は、芽の出そうな種をいただくありがたい時間となっている。

(配達ボランティア 祖田智恵子)